

NotebookLM スライド再利用から見た「AI アップデート時代の仕事の設計」

はじめに

今回の「ゆっくり AI×ファシリテーション勉強会（第18回）」は、NotebookLM が出力するスライド（PDF）を“使い回せる資料”に整える、という実務的なテーマから始まりました。ところが当日は、その課題に対してちょうど追い風になる NotebookLM の新機能が発表され、しかも参加者の環境では実際に試せる状態になっていました。結果として、単なるノウハウ共有ではなく、「AI が更新され続ける世界で、私たちはどう働き方を設計し直すべきか」を、短時間で体感する回になったと思います。

この洞察レポートでは、当日の内容（PDF スライド再利用の手順、新機能の実機チェック、情報源や試し方の共有）を踏まえつつ、もう一段深い視点で、AI 活用とファシリテーションの“本質”を整理します。技術的な話も扱いますが、目的はツールの紹介ではなく、読者が「自分の現場でどう再現するか」を掴めるようにすることです。

1. 「PDF スライド問題」は、ツールの欠点ではなく“再利用設計”の不足として起きる

NotebookLM のスライドが PDF で出力され、編集や再利用がしづらい。これは確かに不便です。ただ、もう少し構造的に見ると、この問題は「NotebookLM が悪い」ではなく、私たちの仕事がそもそも“再利用を前提に設計されていない”ときに顕在化しやすい、と言えます。

仕事の資料は、本来「一度作って終わり」ではありません。提案、共有、研修、報告、営業、採用…用途が変われば、同じ素材でも構成やトーンが変わります。つまり資料は「完成品」ではなく、更新され続ける“運用資産”です。PDF は見た目が崩れにくく共有に強い反面、運用資産としての更新性が弱い。ここに、再利用の摩擦が生まれます。

では、解決は「PDF を編集可能に戻す」だけでしょうか。むしろ重要なのは、PDF にする前に、あるいは PDF になった後でも、次の問いに答えることです。

- 何を資産として残したいのか（構成、言い回し、図、論点、データ）
- 何は捨ててもいいのか（装飾、レイアウトの細部、完全な復元）
- どの工程は AI に任せ、どの工程は人が握るのか（判断・責任・品質）

この3点が決まると、PDF スライド問題は「面倒な変換作業」ではなく、「再利用のための工程設計」に変わります。今回の勉強会が価値を持ったのは、まさにこの工程設計を、デモを通じて共有できた点にあります。

2. 実務で効くのは“変換テク”より「編集可能な状態に寄せる」発想

当日は、NotebookLM のスライド（PDF）を、PowerPoint 等で再利用できる形へ近づける流れが示されました。ここで得たいのは「完璧に元通り」ではなく、「編集可能な状態で次の作業に進める」ことです。

現場での再利用を想像すると、必要なのは大抵次のいずれかです。

1. 構成だけ使いたい：見出しと要点が残ればよい（作り直し前提）

2. 文章も使いたい：テキストとして編集できる状態がほしい
3. 図やレイアウトも使いたい：視覚資産として流用したい
4. 全部使いたい：時間がないので極力そのまま再利用したい

この4つは全部同じ難易度ではありません。とくに(4)は、PDFの性質上どうしても難しくなりがちです。だから現実解としては、(1)~(3)のどこを狙うかを決め、「狙った部分だけを高確率で回収する」方が成果につながりやすい。

ここで生成AIが効くのは、変換作業そのものよりも「取り出したい情報を、次工程で使える形に整える」部分です。たとえば、スライドの見出しを整理して章立てを作り直す、要点を短文化して箇条書きに統一する、言い回しを提案書向けに整える、など。これらは人間がゼロからやると地味に時間がかかりますが、AIに任せると短時間で“たたき台”ができます。

ただし重要なのは、AIの出力を「正解」と扱わないことです。AIは便利ですが、文脈の取り違い、固有名詞の誤り、微妙なニュアンスのズレが混ざり得ます。そこで、最終的には人が「この資料で何を伝えるか」という意図を握り、確認と整合性を取る必要があります。AI活用が上手い現場ほど、AIの能力よりも「人が握るべきチェック観点」を先に用意しています。

3. “新機能の実機チェック”が盛り上がった理由は、単なる最新情報ではない

今回のピークは、NotebookLMの新機能（PPTX出力）を実機で確認できた瞬間でした。これは「新機能がすごい」だけで盛り上がったものではありません。現場の感覚としては、むしろ次の2つが大きいと思います。

- 自分たちが苦勞していた問題が、改善される方向に動いているという希望
- “知った”ではなく“触った”ことで、仕事に使えるかの判断ができる安心感

AIの世界では、新機能やアップデート情報が毎日のように流れてきます。情報量が多すぎると、読むだけで疲れますし、結局試さずに終わることも多い。ところが、短時間でも実機で確認できると、情報が“行動可能な知識”に変わります。

そしてもう一つ大事なのは、新機能は「できること」だけでなく、「できないこと」や「注意点」を同時に教えてくれる、という点です。たとえば、形式としてPPTXにできても、編集性が期待どおりではない場合があります。あるいは、環境差（アカウント、順次展開、設定）で体験が揃わない場合もある。こうした“落とし穴”は、記事では見えにくく、実機で初めて分かります。

だからこそ、今回のように「実機で試す→注意点を言語化する→共有する」という流れは、単なる勉強会ではなく、コミュニティが“実務のセンサー”として機能する瞬間でもあります。

4. 生成AI時代の生産性は「速さ」ではなく「作り直しを減らす設計」で決まる

参加者に持ち帰ってほしかった結論として、「AIのアップデートは驚くほど速い」という言葉がありました。この速さは、放置するとストレスになりますが、設計次第では強い武器になります。

鍵は、「速く作る」よりも「作り直しを減らす」ことです。資料作成で一番時間を奪うのは、実は最初の作成ではなく、後から発生する修正・差し替え・別用途への転用です。だから、今回扱った“PDFの再利用”は、単なる小技ではなく、作り直しを減らすための大きな一手です。

では、作り直しを減らす設計とは何か。実務的には次の3つに集約されます。

1. 素材を再利用できる形で残す（テキスト、構造、根拠、リンク）
2. 工程を分離する（構成づくり／文章化／デザイン／最終確認を混ぜない）
3. チェック観点を固定する（数値、固有名詞、引用、表現、対象読者）

生成 AI は、(1)と(2)の部分で特に効果を発揮します。逆に(3)は、AI に任せると危険になりがちで、人が責任を持つ必要があります。ここを押さえると、AI のアップデートが来ても「自分の工程設計」を大きく崩さずに取り込めます。つまり、ツールの変化に耐える“仕事の骨格”ができます。

5. AI×ファシリテーションの本質は「学びの回転数」を上げること

今回の勉強会は、講師が教える形ではなく、ツールを使ったことがある人がデモをし、分からないことがあれば参加者同士で話し合うスタイルでした。この形式は、AI 活用と非常に相性が良いと感じます。

理由は単純で、AI 活用は「知識」よりも「運用」だからです。運用とは、試して、詰まって、直して、共有して、また試す、という循環です。これを一人で回すと時間も気力も消耗しますが、場があると回転数が上がります。今回、リピーターが少なくとも3名いたことも、場が“学びの習慣”として機能し始めている兆候と言えます。

また、最大8名という少人数も効いています。少人数だと、質問が出やすく、コメントが拾われやすい。参加者が「NotebookLM 使ってみます」「深掘り講座をしてほしい」と言える空気が、学びの熱を保ちます。これは、技術そのものというより、ファシリテーションによって「試していい」「未完成でいい」「次につなげていい」という心理的安全性が支えられているからです。

6. まとめ：アップデートが速いからこそ、軽く試して、共有して、積み上げる

第18回で確認できたことは、二つあります。

一つは、NotebookLM のスライド再利用という具体的な課題に対して、生成 AI を組み合わせれば“次工程に進める状態”まで持ち込める、ということ。

もう一つは、AI のアップデートが速い時代には、最新情報の収集よりも、「試して判断し、注意点まで共有する」方が価値になる、ということです。

生成 AI の世界は、これからも想像以上の速度で変わっていきます。だからこそ、完璧な正解を待つよりも、軽く試して、学びを共有し、再利用可能な形で積み上げる。今回の勉強会は、そのやり方を30分の中で体感できた回でした。読者の皆さんも、まずは自分の現場の小さな困りごとから、試してみてください。そこから、仕事の設計そのものが少しずつ変わっていくはずですよ。

※ご注意ください

本資料は、Creative Guild で開催した勉強会の内容をもとに、AI (ChatGPT) を活用して自動生成されたものです。内容の正確性や完全性については保証できない点をご理解ください。ご自身の判断や追加の調査とあわせてご活用いただければ幸いです。Creative Guild は本資料の内容に対する責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。